

平成28年度
四倉中学校

学校だより

2月24日(金) 第40号

文責 校長 中根 猛

3月11日が近づいてきました～6年目の祈り～

東日本大震災から6年が経過しました。3月11日が近づいてきました。四倉中学校は、津波の被害と液状化現象によりライフラインが絶たれ学校の機能を失いました。そのために四倉小学校と四倉高等学校の教室をお借りして授業を再開しました。復興に向けて必死の努力がなされ受験を控えた3年生が一足先に本校舎に戻りました。震災から1年を要して全校生徒が本校舎に戻ることができました。震災直後から復興までを当時の木村秀子校長先生がしたためられた記録からご紹介します。震災の記憶を風化させないことが私たちのつとめだと思っております。

被災校の取り組み「復興を信じて」

3月11日、卒業式が終了し、生徒たちや保護者の方々を見送って約2時間半後、大地震が起こった。液状化現象により、今では本校の被災モニュメントにもなっている巨大浄化槽が、地中からニョキとその姿を現し、校庭には不気味な水が湧き出してきた。その時、これはただならぬ事が起こるのではないかという予感があった。

全職員で貴重品を車に積み込み校庭に避難していると、「校長先生、津波7メートルだそうですね」との声。ここは海拔0m。スイッチが入った。「全員、車で四倉高校へ避難。急いで！」

全職員が避難した10分後、津波が学校を襲った。これによりライフラインが絶たれ、学校としての機能を失った。校庭に夥しい瓦礫が流れ込んできたが、校舎自体には比較的損傷が少なかったことが、せめてもの救いだった。

ライフラインが絶たれた中、生徒の安否確認を急いだ。避難所を回り名前の確認をすると共に、担任は携帯電話や家庭訪問で連絡を取る一方、主任や管理職は生徒からの聞き取り調査を行い、姿を見たという生徒を「生きている」として名簿に書き込んでいった。しかし、その後の原発事故により、各家庭が県内外に散り散りになってしまい、全校生徒の安否確認は不可能となった。

機能を失った本校は、平第三中学校へその事務局を移した。平第三中学校からの温かいご配慮をいただきながら、全生徒の避難先の所在確認や入試事務処理、年度末や新年度の準備等の仕事を全職員で黙々と行った。平第三中学校で連絡を取るに当たって、大変役に立ったのが無料で使える公衆電話であった。また、電話よりもメールの方が確実性と即効性に優れていることを実感した我々は、その後職員と保護者のメールによる緊急連絡網を作成した。現在、緊急連絡事項に関しては、学校からのメール一斉送信により、生徒への連絡に当たっている。

4月6日に入学式と始業式があることがテレビのテロップで流れ、一人一人に電話連絡すると、どれだけの生徒が集まるだろうかとという我々の不安をよそに、ほとんどの生徒たちから出席したいという返事が返ってきた。式当日は、再開を喜ぶ生徒たちの声があちこちに弾けていた。

浜通りの郵便局長会と地元の建設業者より、ボランティアの申し出があった。本校校庭の瓦礫を撤去しようというものである。4月2、3日にかけて本校職員、局長会員合わせて、延べおよそ120名程の人数が集まり、瓦礫撤去作業を実施した。手際よく作業を進めてくれた局長様たち、熱心に瓦礫撤去に当たってくれた建設業者の方々に心から感謝申し上げたい。後に、これに関しては地域の方々からの労いの言葉があり、自分たちが出来ることをコツコツとやっていくことが地域の希望となり、やがては復興の道に繋がる大切なことではないかと我々は気づかされていた。

4月6日から学校再開となるにあたって、学校機能が麻痺している本校は、1、2年生が四倉小学校、3年生が四倉高等学校の校舎をお借りして授業を行うことになった。4月5日、自衛隊の協力を得て、生徒たちの机や椅子、職員の事務用品等の運搬を行った。事前に自衛隊の方々との打合せを行い、保護者や小中職員の方々、生徒たちの協力を得、スムーズに作業が進んだ。お陰様で、何とか授業が再開できる場所が確保できたことは大きな喜びであった。

大地震の直後から授業再開までの緊迫した様子や復興にむけての取り組みを引用しました。裏面には、四倉小学校と四倉高校での授業の様子や本校への復帰に向けての取り組みをご紹介します。

学校が二手に分かれることになり、職員の配置を工夫した。授業時数の関係から、まず各学年に五教科の教科の教員を配置し、技能教科の教員には二つの学校を渡り歩いてもらうことにした。幸い、本校規模では、各学年にほぼ五教科の教師を配置することができ、技能教科の教員の協力も得ることが出来て、比較的スムーズに授業は流れた。しかし、特別教室の使用や行事に関しては、小学校や高等学校との念入りな打合せが必要であった。特に体育館の使用については他に代用がきかず、おまけに放射線量との関係で、4月当初は校庭での活動が制限されていたので、お互いに譲り合いながらの活動であった。保健体育科の教員には苦勞をかけたと思う。

また、小学校では、図書室や調理室をお借りしての授業であったので、使用教室を固定せず、ローテーションで全学年を回して、一つの学級だけが負担を負うことがないように工夫した。

4月下旬、屋外活動の制限が解かれた。それに伴い、保護者からの部活動に関する問い合わせも増えた。本校は活動場所が制限されているため、まずは小学校や高等学校、方部小中学校への協力を依頼した。同時に、部活動保護者会を開催し、学校の方針や学校周辺の放射線量についても説明した。また、本校舎の校庭は、汚泥撤去と砂地の入れ替え、体育館はその一部補修が出来れば、使用可能となるので、市教育委員会へ相談し、地元建設業者に請け負ってもらい、5月中旬には校庭で、下旬には体育館で部活動ができるようになった。こうして、5月中旬にPTA総会を開催し、部活動再開について保護者全員に説明をし、了解を得ることができた。

現在は、2学期から3年生が本校舎へ戻って授業を再開している。また、学校のライフラインは絶たれたままだが、3年生は受験生でもあるため、できるだけ落ち着いた環境で学習に専念させたいと考え、保護者の同意を得、実施に踏み切った。仮設トイレ、一部の電源と水源の復旧で細々と学校生活を送っているが、住み慣れた学校はやはり居心地が良いらしく、生徒たちの笑顔が輝いて見える。

3月から7ヶ月。全職員、全生徒でずっと駆け足で走り続けている気がする。まさに走りながら考え、判断し、実践する。その連続であったように思う。そして、その判断が迷った時、「子どものために最も良い方法は何か」と考えることが、ぶれなく判断できる基準であったことを、今更ながら身をもって知らされた気がする。また、この間、教師や子どもたちとの合い言葉を「不平不満には蓋をして、足りないことにはアイデアを出し合って解決しよう」とし、特に教員には「こういう時だからこそ、子どもたちには、楽しい質の高い授業を提供しよう」と呼びかけた。その言葉を信じて、一緒に考え、行動を共にし、駆け抜けてくれている全職員に、全生徒たちに心から感謝したい。

ゴールが少し見えてきた。まだ距離はあるが、みんなで走り続けたい。

いわき市中学校長会編 平成24年3月11日発行
東日本大震災教育実践記録「あの時そして明日へ」より